

しかるあいだ、かの御恩徳のふかきことは、迷慮八万の頂、蒼瞑三千の底にこえすぎたり。報ぜずはあるべからず、謝せずはあるべからざる者か。此の故に、毎年の例時として、一七か日のあいだ、形のごとく報恩謝徳のために、無二の勤行をいたすところなり。

(『御俗姓』真宗聖典八五一頁)

仏法には、明日と申す事、  
あるまじく候う  
仏法の事は、  
いそげ、いそげ

第20組 法蓮寺住職

義盛 幸規

text by Kouki Yoshimori

平成二十三年春、東日本大震災の日の朝早くに、私が住職修習を受けた際に帯同してくださった総代が、命終なさいました。

その総代は、私の父と同い年で、小さい頃からの私をずっと見守り続けてくださいました。私が得度すると真っ先に私のことを「新発意」と呼び、お寺を継ぐと決めた時には真っ先に「若院」と呼んでくださいました。そして、平成二十二年に私が住職となった時にもやはり誰よりも先に「住職」と呼び、ともに寺に集う人としてよろこんでくださいました。

しかし、その年の報恩講の直前、その総代がガンであることが判明しました。その方は、病院でガンの告知を受けたその足でお寺に寄って、余命三ヶ月の告知を受けたというお話をして帰っていきました。その翌日から、お寺では報恩講の準備に入ったのですが、その方は連日遅くまで丁寧に準備をし、他のご門徒の方たちに具体的に準備の手順をテキパキと指示していました。

来年は報恩講お勤めできるかわからんからね。

準備をしながらその方はこう仰いました。この報恩講が最後であると覚悟を決めて、やりのこしのないよう、伝えのこしのないよう、責任をもって臨まれたのです。

そのおかげもあって、報恩講は恙なく勤修することができました。後片付けも、その方は自分がいないかもしれない翌年に備えて丁寧になさいました。そして一段落して、お茶で一服した時こう言われたのです。

今年の報恩講は、今までで一番良かった。本当に良かった。

「報恩講」は宗祖親鸞聖人の祥月命日を機縁として、自分のところまで届いてくださった念仏の伝統をよろこぶ仏事です。この報恩講の意義を振り返り、その総代のその言葉を聞くと、改めて蓮如上人の『御俗姓』の言葉が思い浮かびます。

しかるあいだ、かの御恩徳のふかきことは、迷慮八万の頂、蒼暝三千の底にこえすぎたり。報ぜずはあるべからず、謝せずはあるべからざる者か。

此の故に、毎年の例時として、一七か日のあいだ、形のごとく報恩謝徳のために、無二の勤行をいたすところなり。 (『真宗聖典』八五一頁)

仏恩報謝せずにはいられない、その報謝の思いを表現した無二の勤行としての報恩講。総代はきっと「無二の勤行」として、この報恩講をお迎えされたに違いありません。その時の私は、その方にかけるべき言葉を探してばかりでしたが、実は、逆に私にこそ、その方から「無二の勤行をいたせ」という大きな願いをかけられていたのでしょうか。その方の姿勢に改めて、

仏法には、明日と申す事、あるまじく候う。仏法の事は、いそげ、いそげ (『真宗聖典』八七四頁)

という蓮如上人のいましめを確かめることができます。果たして私は、同じように心して仏事を営んでいたのでしょうか。

その総代は、最期の最期まで、身体の痛みと心の苦しみに悩みながら生き、生き抜き、生ききったと思います。そして、無二の勤行たる報恩講をよろこんだその方は、間違いなく浄土真宗の救いをその身に受けた方でしょう。一方、その方の身体を慮っているつもりで、我が身を振り返ることのなかった私に、「自分には明日がある」という根拠の薄い思いが根付いていたことが、今更ながら知らされます。

しかし、報恩講をよろこんだ、その総代との出遇いにこそ、浄土真宗の救いはあるのでしょうか。